

重松清さんの著書を読みはじめたのは、彼が直木賞を受賞する2年前からだった。少年もの、家族ものを主に読んでいた自分に、彼の「ナイフ」や「エイジ」がとびこんできた。

彼は、角川書店の編集者をへてフリーになり、長年、週刊誌などのルポを書いていたので、テクニシャンであることは、まちがいない。どう書いたら読者が泣けるか、そのツボをにくいほどよく知っている。書きすぎもいなめない。

正直、その手にのりたくないと思っている。なのに、いつのまにか涙している自分は、やっぱりミスター・ハーなのかなと、つらい読後感があった。

しばらく重松さんを見捨てていたのだが、新刊「きみの友だち」を村の図書館で見つけて、ずっと手がのびた。

借りてはきたが、自分なりにしっかりサイド・ブレーキをひいた。その手にのるものか、テクニクにひきずられて、たまるか！

「きみの友だち」には、人の言葉と行動のねじれが、なんの説明や弁解もないまま、実に率直に描かれている。人はこうして、こころにもない傷つく言葉を発するのか、がよくわかる。重松さんの観察眼は真剣で鋭く、けっして表面をなぞらない。

サイド・ブレーキをひいていたにもかかわらず、読み終わった自分は、もう号泣に近かった。「ああ、やっぱり泣いてしまった！」

わたしは村上春樹さんの創作では、一度も感動したことがない。唯一胸に落ちたのは「アンダー・グラウンド」という、地下鉄サリン事件の被害者のインタビュー集だけだ。

重松清さんの作品は、村上春樹さんほど世界には通じないかもしれないが、不可視のこころのヒダを表わす、大事な日本語で書かれていると思う。